

そうごうかいはつ 霞ヶ浦の総合開発

年 組 番
名前

— 洪水から水資源へ —

昭和30年ごろ(1950年代後半)までの霞ヶ浦は、岸边にすむ人々にとって、洪水に苦しめられながらも、自然のまま霞ヶ浦と人間がつきあってきた時代でした。この時代をすぎると、洪水が起きないようにする(治水)とともに、水を利用する(利水)という、総合的な開発の時代に入りました。

飲み水や畑の水、工場で使う水などに利用されています。霞ヶ浦の流域には、水をきれいにする浄水施設があり、私たちが台所、風呂、トイレなどで使う水道水や工場で使う水を供給しています。

① 今の洪水対策

洪水から私たちの暮らしを守るため、常陸利根川の底を掘ったり、川幅を広げたりして水の流れをよくするための工事が行われました。また、海が満ち潮になると、海水が川の上流へ向かって上ってくることで

発生する塩害(稲作や飲み水への被害)も防ぐため昭和38年(1963年)に利根川と常陸利根川との合流点に常陸川水門(逆水門)が造られました。

そして、平成8年(1996年)に以後にかすみがうらこがんせんていぼう霞ヶ浦の湖岸線252kmの堤防(つつみ)が完成しました。

霞ヶ浦のめぐみ



- 飲み水(水道水)
- 田んぼや畑の水
- 工場で使う水 など

- 水産資源(おいしい魚など)
- つり・レジャーの場
- 美しい風景(なごみの場)



常陸川水門



堤防

② 霞ヶ浦開発事業

霞ヶ浦開発事業は、治水(洪水を防ぐこと)と利水(水を利用すること)の二つの目的で行われました。この事業では、洪水をふせぐための堤防を霞ヶ浦の周りに建設し、常陸利根川や霞ヶ浦に流れこぶ川を直すなど湖岸の整備をしました。こうして洪水を防ぐとともに、新たに多くの水が利用できるようになりました。

今では、常陸川水門の操作により、湖の水位(水の高さ)を調整して洪水をふせぎ、水を有効に利用しています。また、この事業で使えるようになった水は、茨城県だけでなく、東京都や千葉県でも利用されています。

霞ヶ浦の水利用の多くは、農業用水として使われています。水田や畑にはたくさんの水が必要です。

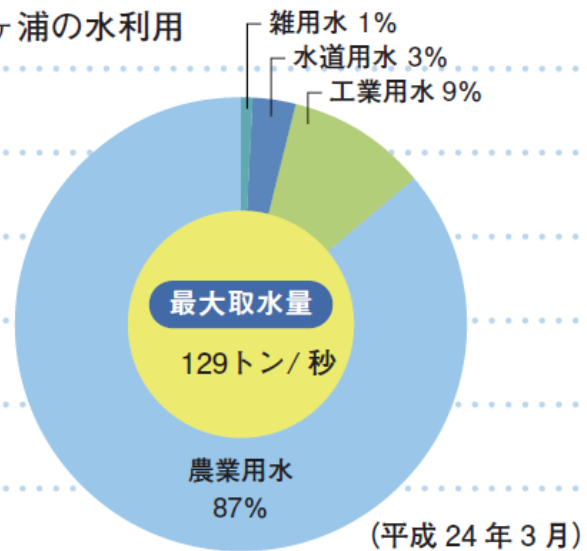
次に使われているのは工業用水です。工場では製品を作るときに機械や器具などを洗うために水を使います。水道水は家庭や学校などで、台所、洗濯、お風呂、トイレで多くの水を使います。

③ 水道水

近年、私たちの生活は以前にくらべて豊かなくらしに変化し、水の使用量が増えています。昭和35年(1960年)に水道水の供給が始まりました。その後、霞ヶ浦流域の急速な都市化、工業化によりたくさんの水が必要となったため、何回も工事や水の処理方法が改良されました。今、霞ヶ浦は、県南地域を中心に、22市町村における水道水として、多くの人々に利用されています。



霞ヶ浦の水利用



のうぎょうようすい
④ 農業用水

霞ヶ浦の周りでは、稲作や畑作等の農業がさかんに行われています。特に、稲作は、約440km²で行われています。これは、治水や揚水(水をくみ上げる)技術の発達により、安定して水を利用することができるようになったためです。また、霞ヶ浦用水により、農業で使う水が不足していた県南、県西地方にも、水を送ることができるようになりました。



④ 工業用水

霞ヶ浦の水は、鹿行・県南・県西の工場などで利用されています。特に鹿島では、鹿島臨海工業地帯があることから、年間2億5千万トン以上の水が使われており、これは、茨城県の工業用水道事業全体(年間3億3千万トン)の約8割に当たります。

* その他学習資料
霞ヶ浦河川事務所
茨城県企業局ウェブページ